

〔公開講演会報告〕

障害者・高齢者の自立と介護 — 自立と介護と仲間 —

講師 近 藤 秀 夫 (自立生活センター町田ヒューマンケアネットワーク,
ソーシャルワーカー)

★ 昔の自立・今の自立

私は21年間町田市のソーシャルワーカーをしてきた。昭和10年生まれの61歳である。私の障害者歴は46年で、健常者の目に見えないものが私には見えることがあり、私の経験から障害者の自立について述べさせていたきたい。

☆ 障害—手術—リハビリ—自己否定

障害者には2つあると思う。1つは生まれながら、2つ目は後に障害者になるケースで、私は後者である。16歳の時に障害者になった。私にとって障害者になることは生活を確保した事にもなった。眠る場と食事が確保できたからである。

障害者になると手術—リハビリが行われ、元の体(健常者)に近づけようとする。しかし障害は残り、そこから障害者としての生活が始まる。手術—リハビリは繰り返される事が多く、その後にはもうどうにもならない絶望感が残る。

☆ スロープの話ではなく 人権の話

町田は福祉に基づいた建築を最初に作った市としてよく知られ、15年の間に400箇所ほどに作ってきた。15年の間には大きな変化が起こった。福祉を考えることは、町田市では、町を作ろうとする人の基本的なことであり、当然のことであった。しかし、他市で作られる時には、補助金を付けられることが求められるようになった。道路にスロープを作ることがいくらかと、お金で解決されるようになった。しかし、高齢者・障害者の生活を守る施設は自然な当たり前のお金で、特別予算を立てて考えることではないと思う。

☆ 自立とは 今 生きている こと

45～46年前との大きな違いは、施設の中で「自立」のことを言うと、これも、あれもできなくて、無理だと言われていた。自立は将来のことではなく、「今自立しているか」の延長線上にあるものである。小学生・中学生の様に、今働いていなくても人間としての自立があると思う。そして今、そのような考えに基いた自

立の時が来たと思う。自立はどの窓口にもぶらさがっているのではなく、自立は自分の中にある。

★ 生存権をかける介護

自立の筋道の中にさまざまな介助があると思う。私たちは「介護」と言う言葉は使わなく、「介助」と言う言葉を使う。介助ではヘルパーさんがいるが、前歴の仕事でいろいろな人がおられる。前歴が警察官の人は他者の日報をチェックしていた。人が何をしてきたかは、あらゆる面に残ってくる。もう一人のヘルパーさんは年配で、仕事の途中で眠ってしまった。今日ヘルパーさんが来るとなると、来てもらう人は朝から片付けをする。介助は必要で大切なのだが、このような心もわかってほしい。町田市は週3回、朝7:00～夜7:00の介助を考えているが、重度の障害を持つものには不十分だ。

☆ 単身二人暮らし

障害者の自立問題は家(住居)にある。現在、自立を希望する二人の人がいるが、一人はコミュニケーションが十分とれない。メインになる介助者に絵文字を知らせ、本人も絵文字を覚え自立を始めた。もう一人は24時間介助が必要だ。家を探す時、一人ではあるが、介助者を入れた時を考えると、ワンルームでは不十分である。収入は年金と手当てであるが、家は生活保護を前提として探す。24時間介助で、一か月に64万円かかるが、行政が支払う。障害者が支払うことが全くないのは、町田市の福祉のレベルであり、全国的にはこのレベルにない所が多い。介助者を集めるには、ピラ配りよりアルバイトニュースが有効である。面接には、介助をしてもらう人も入り、さまざまな人との出会いで感動する事も多い。

☆ 車椅子の押し方 いろいろ

町田に福祉専門学校があるが、ヒューマンネットワークにたくさん生徒が来る。生徒には、車椅子の操作についてはほとんど説明しないで、コミュニケー

ションをとることの大切さを伝えている。車椅子の押し方には様々なスタイルがあり、車椅子の性能にもよるが、恋人関係で押す方法と、後ろからボランティアとして押す方法がある。人間関係が結べる介助の方法が良い。介助者は人間の一番大切さを感じられる人が良い。

★ 「物」で見る障壁

車椅子の人にとって10cmの段差は、健常者の感じる1mの段差と同じである。駅のホーム等は公共の場なので、十分配慮するのは当然だと考えられる。

☆ 月にロケット・車椅子に3cmの段差

町を作ろうとする時の基本的責任は、小さな子供から老人まで生活できる町を作ることである。駅のホームの段差に話を戻せば、段差が何センチで上れないのかで、障害の有無は決められない。健常者と言われていた人の中にもそれぞれに障害を持っている。『月にロケットが行ったことを全世界の家庭にTVで見られるようにした』これは立派な一般市民への介助であり、『2cmの段差を車椅子が昇れるようにする』のも介助である。

☆ 「心がない」制御装置

椅子文化を基本にするヨーロッパでは、車椅子は人を乗せるように設計されており、椅子文化を持たない日本では、荷物を乗せるようにできている。椅子文化の車椅子は背もたれ等、座り易く設計されている。また、脳性麻痺の人は、電動車椅子のレバーをそっと押

すことができない。そこで、スウェーデンの車椅子には制御装置がついていて、その制御装置は日本製である。日本の車椅子には制御装置がついていない。技術大国日本の中の障害者には、技術に対する恩恵が非常に遅い。46年前の車椅子は木製で今はアルミ製だ。12～13kgだった車椅子が、今私が使っているのは、チタン製の7kgだ。もちろんこのチタン製の車椅子もスウェーデン製だ。技術が本当に必要な人に降りて来るのに時間がかかる。大企業の持っている高度な技術の、何分の一が障害者に降りて来ているだろうか。

★ ビア「仲間」として

☆ 認めあう 自己決定権

すべての障害者が人間として生きていくことは、生き方に自己決定権を持つことだ。町田ヒューマンケアネットワークでは「自分はどのように生きたい」と自己決定をした時はあらゆる介助をしたい。この制度が役所にあると、もっとさまざまなことができるだろうと考えられるが、役所には入らないだろう。また、役所でないからできる介助だろう。市民は役所を使う側にあるので、役所のさまざまな機能を有効に使うほうが良い。

ほんとうにその人のために生きていこうとする人を、「にようば」でないケースは「仲間」と呼ばせていただきたい。

(リハビリテーションコース 荒木順司)